

## フィリピン滞在記 ⑩---パンガシナン州ダグーパン市へ移動

為我井輝忠

昨年(2015年)10月に前年の契約満了で日本に帰国はしたものの、11月中旬に再度、日本語講師としての契約が更新になりフィリピンへ戻ることになった。2期目の今回は私の希望でパンガシナン州(Pangasinan)の州都・ダグーパン市(Dagupan City)へ赴任した。ダグーパンは前任地のサン・フェルナンドから南へ向かったマニラ方面へ2時間程行ったところにある、人口20万人の中都市である。今度はマニラに出るには時間が短縮されて、5~6時間となり、かなり便利になりそうだと言ってもよいだろう。

ルソン大学(University of Luzon)は私立のカトリック系大学で、学生数は5000人位と聞いている。初めて訪れた時の印象は、元気でフレッシュな20歳前後の男女の学生多数が校内を闊歩していて、そんな風景を見てみると、大学はたとえ外国であってどこも変わらない、何10年も前の自分の大学時代と何ら変わらないと実感した。

フィリピンでの大学新学期は6月に始まるた

めに、私の今回の赴任は後期からということになる。来年の10月末までである。後期の授業は11月13日から始まった。新たに受講申し込みをした学生は20人程で、教務課の係の人が言うには、最終的に40人近く登録するかもしれないということであった。実際その通りであった。教室いっぱい学生が詰めかけ、彼らの真剣な顔付を見ると、ある意味ではついぞ日本では見かけなくなった光景である。私の担当は週3回(月、水、金曜日)で、午後2時から3時までの各1時間である。テキストは『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク)を使うことにした。

日本語を学ぶ学生は、Business ManagementとHotel Managementを専攻する学生で、1年生から4年生までの混合クラスである。受講生は、大体18歳から21歳位の学生が中心であるが、中には27歳や31歳の女性がいたりして、彼女たちは大学院の学生かもしれない。また驚いたことには、40代の子供連れの子もいて、毎回子供を連れて来ていた。留学生も一人い

る。父親がスペイン人、母親がフィリピン人という女子学生で、Hotel Managementを学んでいる。男女の割合は、男子学生が5人で、あと30数名は女子学生である。ここでも外国語を学ぼうとするのは圧倒的に女子が多い。それは日本でも事情は同じである。



ルソン大学の日本語を学ぶ学生と共に



クリスマス休暇でほとんど学生の姿が見えないキャンパス



ひらがなをホワイトボードに書いている学生

12月はクリスマスの時期のために授業も予定表では23日が最終日となっていたが、実際は18日が最後の授業で、あとは1月3日までクリスマス休暇で休みである。最後の18日はまだたくさんの学生が来るものと思っていたら2人しか来なかった。こうなると1月4日もあまり来ないものと予想される。

こんな風にしてあっという間に1か月は過ぎ

てしまった。これからクリスマスや正月の長い休暇をどう過ごすかと悩んでいる。幸いにして、授業のアシスタントをしているフィリピン人が家に招待してくれることになり、大いに楽しみである。またいくつかパーティや教会のクリスマス礼拝などにも招かれていて、フィリピンの生の生活を体験できそうである。それ以外にも4～5日の旅行も計画中である。